様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成　25　年　6　月　7　日現在

機関番号：14301
研究種目：若手研究（B）
研究期間：平成 23 年度～平成 24 年度
課題番号：23720022
研究課題名（和文）道教の伝経儀式の成立と師観念の展開

研究課題名（英文）The Formation of Transmission Ritual of Taoist Scriptures and the Development of Concepts of Master

研究代表者　金 志玹（KIM JIHYUN）
京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：20553473

研究成果の概要（和文）：本研究は六朝時代から唐代（4 世紀末-9 世紀頃）までの、道教の経典伝授儀礼の成立と、経典伝授と密接な関わりを持って発生した「師」観念について考察する。とくに道教の経典伝授の儀礼化の問題を、三教交渉史・宗教文化史の観点から考え、道教史の展開や六朝隋唐宗教文化史を理解することを目的とする。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to elucidate various concepts of master, which were developed in relation with the formation of transmission ritual of Taoist scriptures in the medieval China. The transmission of scared scriptures in Taoism was critical issue of the ordination ritual of high-rank Taoist adepts through 5th to 7th centuries, which is paralleled with Buddhist ordination ritual of receiving the precepts. This research traces the origins and development of new concepts of Taoist masters, including 'master of mysterious realm (*xunshi*)', 'master of scriptures (*jingshi*)', and the two kinds of 'three masters (*sanshi*)', so as to make clear what is the characteristics of the transmission ritual of Taoist scriptures, as well as the way of using and integrating the Buddhist elements.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・中国哲学
キーワード：中国宗教、中国思想、道教、伝経儀礼、玄師、経師、三師
Chinese Religions, Chinese Thoughts, Taoism, Transmission Ritual of Taoist Scriptures, Master of Mysterious Realm, Master of Scripture, Three Masters

１．研究開始当初の背景

道教における師弟関係は、アンリ・マスペロ氏や吉川忠夫氏によって明らかにされたとおり、血盟秘儀によって結ばれるものであった。特に師は「道に明るい」という意味で「明師」と尊ばれ、また教えの伝授に際して「盟」を結ぶことから「盟師」と称された。ところが、東晋末以降には「盟」のありかたや「師」の観念に変化が生じる。その変化を示しているのが、六朝の江南地域で成立した上清・霊宝の道経群にみられる「玄師」と「経師」、そして「三師」という新しい師の観念である。従来の道教儀礼の研究においては、上清経の伝授儀礼が取り挙げられることが少なく、これらの「師」観念に関する研究は皆無に近い。

5 世紀以降は、「三洞」という道教経典の分類体系が成立し、各経典群に対する伝授規定が定められ、道観の組織と制度が整備されるなど、様々な方面において道教の体系化が進んだ。同時期の中国仏教において、出家者の受戒儀礼が重要な関心問題であったのに対して、道教においては道士の伝経儀礼が重要問題となっていたのである。道教の伝経儀礼と、それと密接に関連する「師」の観念を考察することは、体系化していく道教のありか

たを解明するうえで欠かせない問題である。

２．研究の目的

本研究は六朝隋唐時代（4 世紀末-9 世紀頃）までの、道教の経典伝授儀礼の成立と、経典伝授と関連して現れた「師」観念について考察する。とくに道教の経典伝授の儀礼化の問題を、三教交渉史・宗教文化史の観点から考え、道教史の展開や六朝隋唐宗教文化史を理解することを目的とする。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するために、まず標準的な経典伝授儀礼における「師」の観念について考察を行い、その後、様々な「師」観念の由来やその歴史的な変遷を究明する。

標準的な儀礼を定めるテキストとしては、『無上秘要』（巻 34−巻 40）、『三洞奉道科戒儀範』（ペリオ敦煌文書 2337）、『洞玄霊宝三師名諱形状居観方所文』を用いた。主な分析対象となる「師」の観念を図式化すると、次のとおりである。

【三宝】

〔道教〕	〔仏教〕
道（大道）	仏
経（尊経）	法
師（玄師）	僧

【三師】

①〔経典の伝授系譜上の三師〕{通時的}
経師
↓
籍師
↓
②〔臨壇三師〕{共時的}　保挙---度師---監度

この図式で示されたように、仏教における仏・法・僧の三宝は道教の三宝観念の形成に影響し、道教と仏教の三宝の間に形式的な類似性が認められる。さらに道教の経師観念の登場は、道教内部の要因の他にも、同時代に盛んに行われた仏典の訳経、中国仏教における経師観念と関連している可能性もあり、比較研究が必要である。

ただし、経師観念の展開は、仏教と道教の経典観の相違に応じて、それぞれ異なった方向に進んだと考えられる。仏教において経典は秘伝すべきものではなく、むしろすべてのものに公開すべきであり、また経典の普及が一つの功徳であったのに対して、道教において経典は厳格な規定のもとに、しかるべき人にのみ秘伝するものであった。そのような経典観の違いが、道教における経師に独特な意味をもたらしたと推察される。また経師が道教においてそのように特別な意味を有するなら、それは六朝時代以降、経典の伝授を中心に体系化した道教の特色を解明する鍵といえる。

本研究は以上の点に注目し、まず道教の三宝（道・経・師）のうち師宝に位置づけられた「玄師」観念について考察を行い、その後①「経典の伝授系譜上の三師」（経師・籍師・度師）と、②「臨壇三師」（保挙・度師・監度）とで大別し、諸々の「師」観念の意味や、その由来と歴史的変遷を明らかにする。考察にあたっては、道教史の内的側面と道仏交渉史の側面からアプローチする。

４．研究成果

【平成 23 年度】

23 年度は「玄師」と「経師」の観念を中心に、「経典の伝授系譜上の三師」（経師・籍師・度師）について考察した。「玄師」は道教の三宝のうち、師宝にあてられたが、その淵源は 4 世紀末の茅山の啓示と上清経の成立に遡る。「玄師」は霊媒楊羲のもとに降臨した仙人魏夫人を指し、「天界の師」、「道の世界における師」の意味を持つ。「経師」は玄師から天上の経典を授かり許謐一家に伝えた人物、楊羲を指す（『真誥』）。楊羲の手によって出された上清経においては、「経師」の尊重が唱え始められた。355 年の紀年がある『上清高聖太上大道君洞真金玄八景玉籙』は『大洞真經』の伝授規定を載せており「経を授くるを師君と曰い、経を受くるを弟子と曰う」、また「此の経弟子と為る者は、･･･師君を尊奉すべし」と、経典を持つ者を師君として尊崇すべきことが語られる。ここにおいて師弟関係は、「経弟子」という言葉が端的に示すように、「経典」そのものが関係の中心となっている。茅山の啓示において、またそれ以降の道教においても同様であるが、道教経典は天界より降授されたものとして神聖視され、師の権威もそのような神聖なる経典を持つことによって確保されたのである。4 世紀末「経師」は、このように尊崇すべき存在として語られてはいたが、実際には楊羲のごとく、媒介役に過ぎず、まだ師としての権威を持つものではなかった。

その後、霊宝経において「経師」の位置づけは一変する。霊宝経は上清経に書かれた「経師」への尊重を受け継ぎ、「経師・籍師・度師」の三師の尊崇を儀礼化した（『洞玄金籙簡文經』）。「度師」は経典を授ける直接の師、「籍師」は「祖師」、すなわち師の師にあたり、「生死の録籍」をつかさどる存在とされる。「経師」は「曽師」、すなわち籍師の師であり、経典の伝授系譜のうえで曽祖父にあたる。要するに、経師は経典の由来するところとして崇敬の対象とされたのである。三師は、経典の伝授系譜の由緒正しさを証明するものとして、授経の際に三師の諱を記し経典とあわせて伝授されるのみならず、誦経の際

にも師の姿を思い描き拝礼を行う形で、存思の対象となった。

「師」観念の変遷とともに盟の形式においても注目すべき変化が起きた。古典的な道教の盟は、動物の血をすする「血盟」であった（『抱朴子』）。しかし上清経の成立に伴い血盟は廃止され、神々に伝授の事実を告げる「告盟」と、玄師に誓って経典を自受する「隠盟」という新しい盟の形式が登場した。このような新しい儀礼の登場は、上清経の流布をその背景としている。

茅山の啓示において成立した「玄師」と「経師」観念は、楊羲の沒後、すなわち玄師と直接交通する能力をもつ経師がなくなったところで、その意味内容の変化することは必然的であった。経師を介せず、経典を自受する「隠盟」とは、経師（霊媒）が不在する情況において成立した、上清経の伝授規定であった（『洞真上清神州七轉七変舞天経』『上清太上黄素四十四方経』）。さらに時代が降り、楊羲没後三世代となる6世紀初頭には、経典伝授の際に「経師・籍師・度師」が揃わず、「経師」がいない場合は、「玄師」を立てて経典を伝授した（『洞真太上太霄琅書』）。このような情況は，上清経を陸修静と孫遊嶽より伝授された陶弘景にとって、曽師にあたる経師がいなかったことと符合し、陶弘景は許翻を「玄中之真師」としていた（「許長史旧館壇碑」522年刻碑）。このような上清経の伝授をめぐって起きた玄師と経師の観念の変遷を図式化すると次のとおりである。

【経典伝授における師観念の形成と展開】

①楊羲（330–386）の在世時期（4世紀後半）

玄師
↓
経師（霊媒）
↓
受経者

②楊羲の沒後1世代『黄素四十四方経』の時代（東晋末劉宋初：5世紀）

師受　（有）経師　　（無）玄師
　　｜　　｜
　　→　受經者　←

③3世代頃『洞真太上太霄琅書』の時代（500年頃）

上三代（有）経師（所師の師）　（無）玄師
上二代（有）籍師（師の所師）　（有）籍師
上一代（有）度師（師）　（有）度師
　　｜　　｜
　　→　受經者　←

「玄師」が道教の三宝における「師宝」とされたのは、霊宝経によるものである（『金籙簡文』）。師の代名詞として「明師」ではなく「玄師」が採択されたことは、六朝道教において「玄師」が持つ意味の重さを物語るものである。師寶としての玄師は、仏教の「僧宝」より推し測れば、「世に生きているあらゆる師」を指すはずだが、道教経典に即して考えると「玄師」は天上界より降ってくる神的存在であり、仏教でいえば「聖僧」に近い観念である。

以上の成果を通じて、道教における「師」の観念と伝経の儀礼が、仏教の影響のみならず、道教特有の経典観に基づくこと、そしてその根底には「教えの淵源」を問う中国の伝統的な系譜意識が流れていることが明らかにした。

【平成24年度】

24年度は経典伝授の際に壇上の登る「臨壇三師」（度師・監度・保挙）について考察した。道教における「臨壇三師」と仏教の受戒における三師の比較、および道教と仏教の「経師」観念の比較研究を行った。

（1）仏教における経師：仏教における経師は、一般的には、三蔵（経・律・論）に対応する経師・律師・論師のなかの「経師」を指す。ところが、一方では、「美声をもって経典を転読する僧侶」や「梵唄に長けた僧侶」の意味をもつ、異なる「経師」観念が存在していたことが確認される（梁・僧祐『高僧伝』巻十三）。このような「経師」観念を道教の誦経と照らし合わせ分析することによって、六朝宗教文化の特色として、経典の誦読修行が広く行われていたことを明らかにした。

（2）道教の伝経儀式における臨壇三師：道教の経典伝授の際に壇上に登る三師（保挙・度師・監度）について考察し、仏教の受戒儀式と比較研究を行った。「臨壇三師」と仏教受戒の三師（和尚・阿闍梨・教師）との間には一定の対応関係が認められるものの、「臨壇三師」のなか「保挙」・「監度」はいずれも道教経典にその淵源を置くものである。「保挙」は仙人となる人物を「保証する神仙」を意味するが（「内伝」）、これは六朝の官僚推薦制度にある「薦挙の保証人」観念を取り入れたものであった。そして「監度」は道教修行者を監察する神仙・真人を意味する（上清経・霊宝経）ことを明らかにした。臨壇三師の名は伝経の証人として経典とともに伝授され、道蔵所収の諸経の巻末に「保挙/監度/度師」と記されているのはそのなごりであることが判明された。

（3）道仏交渉史からみる宗教文化：六朝以来唐代まで仏教と道教の間に共通する現象を、受戒と経典伝授の問題を中心に考察した。特に「臨壇三師」が実際に受戒と伝経の場で立てられた実例を検討した。仏教の場合、受戒に和尚・戒師・教師の三師を立てた実例は、405年「十誦律比丘戒本徳祐題記」（シュタイン敦煌文書 797）に確認される。ただし、受

戒に「臨壇」「登壇」の語が用いられるのは、戒壇の形式が定められる唐・道宣の『戒壇図経』の以前は希少であり、唐代以降は「臨壇大徳」の語が散見され、主には「律師」を意味する。

一方、道教の場合「登壇三師」は劉宋の陸修静よって定められ、「五保」を含め、壇上に 38 人の師が登ることが規定された。771 年金仙・玉真公主の受度の際に史崇が「臨壇大徳証法三師」の一人に立てられたことが知られ（「伝授三洞経戒法籙略説」）、時代は降るが、宋代皇后の経籙伝授記録に三師の実名がみられる（『茅山志』巻 25・26）。

要するに、仏教と道教のいずれにおいても、受戒と伝経の儀礼に壇上に登って儀式を進行させる三師が実際に機能していたことが確認される。興味深い点は、各儀礼の空間として、中国古代より祭祀・会盟・受命の時に用いられてきた「壇」を重視し、それぞれの目的にかなうように具体的な制度を決めていったことである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学術論文〕（計 3 件）

１．金志玹、「玄師と経師−道教における新しい師の観念とその展開」、麥谷邦夫編『三教交渉研究論叢続編』京都大学人文科学研究所、pp.57-97、2010.

２．金志玹、「道教授経儀式的形成与「師」観念的発展:研究簡介」、『道教文化研究中心通訊』23、香港中文大学、pp.1-4、2011.

３．金志玹、「伝・訣・経—上清経の形式についての略論」、『中国思想史研究』34、pp.127-146、2013.

〔学会発表〕（計 3 件）

１．KIM, Jihyun. “Moving Gaze in Visualization: Visualization in Shangqing Scriptures.” Workshop on Daoist Studies, January 10, 2012, Centre of the Studies of Daoist Culture, Chinese University of Hong Kong, China.

２．金志玹、「道教の身体論と医学知識：黄庭経及び大洞真経の読みを中心に」国際ワークショップ：東アジア世界の「知」の伝統：科学と思想・宗教のあいた、2012 年 6 月 23 日、ソウル大学校奎章閣韓国学研究院（韓国）

３．金志玹、「従内伝看道教修行過程与世界構造」中・日・韓宗教学術論壇—道教与中国文化、2012 年 12 月 14 日、華僑大学学術交流中心（中国）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
（１）研究代表者
金 志玹（KIM Jihyun）
京都大学・人文科学研究所・助教
研究者番号：20553473